

### 保険史料からみた漫画の歴史(7)

原稿執筆時点では「いよいよ秋も深まり」と書き始めたいところであるが、連載されるのは12月なので早くも冬の始まりということになる。季節も最後の冬を迎える。滝廉太郎は、日本の季節を連作歌曲「四季」で描いた。「春のうららの隅田川」ではじまる有名な「花」は「春」、これに「納涼」「月」「雪」という「夏・秋・冬」が続く。バロック期の作曲家ヴィヴァルディや古典派作曲家ハイドンも「四季」を作曲しているが、いずれも春で始まり冬に終わる「春夏秋冬」である。

ところが四季の始まりが春と決まっているわけではないようである。シュポアという作曲家の交響曲「四季」や、グザヴロフのバレエ音楽「四季」は、冬に始まり秋に終わるようになっている。シュポアの交響曲は、第一楽章が冬で、春と夏が続き、最終楽章で秋となっている。グザヴロフのバレエ「四季」も冬で始まり、収穫の秋を思わす力強い幕切れとなる。グザヴロフの曲を聴くと、農業社会では、豊穰の秋で結ぶのが望ましいのかもしれない。またシュポアは今のドイツでいうと北部の出身であり、グザヴロフはロシアの作曲家なので、北緯が高いという地域性との関係があるかもしれない。彼らにとっては、過酷で長い冬で終わるのは望ましくないのかもしれない。

話はこれで終わらない。「夏秋冬春」という順番の曲があるのだ。タンゴの革命児といわれたピアソラの「ブエノスアイレスの四季」は、ブエノスアイレスの夏、ブエノスアイレスの秋、ブエノスアイレスの冬、そしてブエノスアイレスの春という順番で演奏されるのが通例である。南半球のアルゼンチンは、「夏秋冬春」なのだろうかと考えていたら、「夏秋冬春」の順で曲を書いたフランスの作曲家を発見した。それは、フランス人なら誰でも知っているオペラ作曲家のマスネである。彼に一年を描いたピアノ曲の連作組曲がある。この曲の並びが、「夏秋冬春」なのだ。果たして、フランスの四季は、夏から始まるのだろうか？ともあれ、四季は春から始まるものであるという固定概念を打ち崩す例証であろう。

さて今回紹介するのは、人生のはじめと終わりに関するパンフレットである。漫画というには、あまりに写実的な絵であるが、広い意味で漫画と考えここに掲載した。このパンフレットは、日華生命の「65才の人：これが“貴い人生の縮図”です」という営業史料である。最初に掲載した表紙のデザインは、なんとも下手くそなものであるが、漫画（挿絵）は、写実的で素人が書いたものではない。このパンフレットの冒頭に次のように書かれている。施説明文の冒頭は次のように始まっている。「此の事実、此の数字：我々の鼻の先に突き付けられて居り乍ら、不注意にも看過することができませうか。之を否定することは許されないものでせうか。人力では如何とも致し難いものでせうか。」

「此の事実、此の数字」とは、「25歳の有為な若者の運命は65才のとき」に、「富裕に恵まれたるもの」が百人に一人、「気楽に暮らせるもの」が百人に四人、「自活を続けるもの」が百人に五人、「扶養を受けなければならぬもの」が百人に五四人、「既に此の世の人でないもの」が百人に三六人。というものである。それぞれの画像を掲載した。人生の終わりが、

## 保険毎日新聞「みちくさ保険物語」62

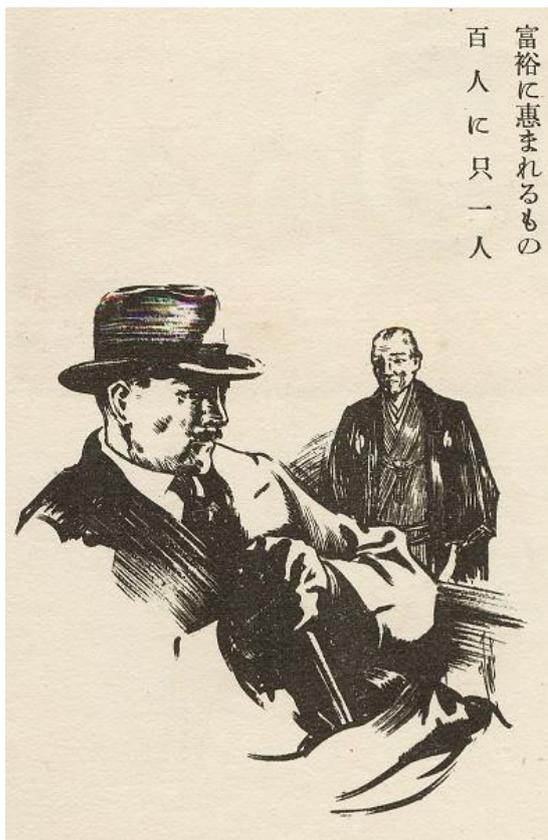
春夏秋冬のいずれが幸せだろうか。「扶養を受けなければならぬもの」は人生を冬で終わる人々であろうか。また「気楽に暮らせるもの」は春で高齢を迎える人かもしれない。とすると「富裕に恵まれたるもの」は豊穰の秋がふさわしい。「自活を続けるもの」は夏ということになる。

ともあれ、人生を冬で終わる人は、「既に此の世の人でないもの」を含むと百名中九十名ということになる。まことに厳しい話である。そこで「保険」の出番である。この冊子は、次のように説く。「賢明な方法を教えてくださいのは、外ではありません。保険であります。あらゆる人生の惨めさ、不安さといったようなものから縁を切って仕舞うのが保険の使命であります。」保険は、「牢乎たる人生の計画を建て直し、安住地を構築」する手段であることを示し、日華生命がそれにお答えできることを強調しています。

ありきたりの筋書きではあるが、漫画（挿絵）が挿入されていることで、顧客への訴えかけが大きなものとなることがわかる営業史料である。



富裕に恵まれるもの  
百人に只一人



氣樂に暮せるもの  
百人に僅四人





既に此の世の人でないもの  
百人に三十六人

